一茶發句集

上

へ 5
6607

へ5
6607

日228
あ旅

学部図書に移管48年6月8日

早稲田大学教育学部図書

60425

<2000-388>

序

一字の説も難かしみ幾
千一畳みち画に乃子
みち出来も又み出雁をも
必めんて數ふるにいとやあ
らうさて出て尓かもめぐらつれ

言へ仰されるまゝに游
尓古池や蛙飛込池の
句なふゝ一葉尓杉
俳み句ありてさ及まゝ
かゝる乃句なふし證か
もて此句のみせ侍

911.35
I857

味に指をそ深めのこと
あふらも一以に西は
我をと吞中果くて始
可暁更恵雨し其を
一序以て十にさて我
常をとしてもらとは我

しい文は十に多重
法あ中の多秋玉を
こけ其こみ字にて佐
ける佐所題

俳諧寺
一茶肖像

春甫曼信寫

おのれか
まろさよ
ひいき目に見て
さへ寒き
そぶりかな

一茶

一茶發句集上

春之部

元日や上ゝ吉の淺黄空

元日も立のまんまの屑家哉

還曆

春立や愚の上にまた愚にかへる

新家賀

年立や雨おちの石凹むまで

蓬莱や唯二丈の古代の松
富士画子
初春や千代のためしに立なみ
出谷の山中に年籠りして
歌よみし清僧の顔なり梅の花
三嶋の井手にて梅女梅木かゝみ
なかりとこのや
若水のやさしき人に汲れけり
福藁や十年のかはる　借奴

かゝ獅子の腰くだけぬ門の松
逆しまや老親まで　五十賀
初夢に猫も不二見る寝様かな
待菜に心あると子の日哉
小松引く人とて人はなかりけり
堀川や蕪のあたまも津のしま
天神祭
ちさいその席上下や梅乃花
梅の木や飾にや飾ぬ二月の月

梅折や袖にまつはる大内に

相馬覧古

梅ちるや平親王乃店月秋

梅咲や唐土の春も我先手

月の梅の都の本んふかくのとゝ空も色ぬ

筆笠や梅の咲日を吉日と

山ざとりも清らしく新室を

崖すなてらるゝを

二歩判の初音出しけり梅乃香

下戸村やえんえんとして梅の香

梅の香家を塗ぬとさし入れる

そゝ経と人手ハ告よ梅の香

鳴原

入口ハあいそうになく柳哉

犬の子の錦えて眠る柳この形

けゝかみえんとして鳥と柳哉

味巌山

学も親子活き先や梅乃香

うしろ向に立てうつゝく垣根哉
鍬の柄に鶯鳴や小梅村
黄鳥の声待てにまちまちや　祖交
松室にありて
うつり人の跡さへこのぬ垣根哉
黄鳥や流もぬれて梅のもと
鶯の声くらし鳴や菊王成
うつり来やよくあきらめて花の影

老婆浣衣画

後の桃ら流れもあるよ春霞
軽井浮
笠くもるそこはしもやうち霞
菜翁とあそふ
此門の霞むまほしくや稲田の鶴
栗之六十翁
古松や又あるこゝろもしくしく霞
うかむくや霞んてきえて小鳥哉
誰それと声かけて一霞むや門の春

西山や柳の色う霞かゝれとの家

小児のおとけあふきを

鳴猫に赤き貝をしくゝ手まゐらせ

素清か母八十八歳賀

門畑や米の字あかり鶴飛

雪とけや踏まる云走臼干

世ハあれハむりにとりかゝや門乃里

庵の雪下るに深く積りゆき

いなや杖をはなれし雪解川

三日月をそゝるともさんかつる

藪入や墓の松風うしろ吹く

芽出しそろ人さし州ハあかの里

庵守賀

福の手も門や野山の錦笑ひ

かくれ家や猫にもすへる二日灸

初午

あの世まで雲雀乃声鳴ふくめり

籠もかゝぬ口ふるさとの流れ種

一年ちゞまりく親もちあひのき
さかりけん寸かし
出代や汁の実なとも蕗の薹
世のなかりやはくも同し梅の花
二月十五日雪ふりけるに
雪のところへ雪のふる涅槃式
あかく都く大夫しく猫の恋
蒲公英の天窓をふんて猫の恋
うかれ猫赤町に集くとこるかな

りうけの結ちんに綰やかゝ日の暦
板橋
かしこしや江戸見かへる鳥居様
閏二月二十九日とりわけ寒九衛
世こくりぬれハ郊とく阿弥陀袋
首にかけて足達ぐく例の角田
堤にかゝる寺をめくりてあみ
まれと小薮小家をいまく闇
かりきしあつる并上のおもしろきものに

みよし川の出てに天地丸あくと
うちかへし田井を耕にさとかへり
くろ鍬をもちくし枝をけとして
おのくに植をとりへより
鍬の冊らんのまで木にいつらを
素振を伏しいつめてを代を
はやくとも見へ待る
西高時や流舟をとりんて帰る房

善光寺

開帳に来るや雀も親子連
雀の子そこのけし流るゝ通る
外にいさ梅にいさとや親雀
雀子のや柳体ぬ葉の流しけと
慈出されハ糞をとまる雀の子
雛子啼やきのう艘をし子代の松
夕雛子の声り笛や將九條
黒門や下々みしくと雛子孫

独坐

初見とはきゝなしてける　蛙の声
雨しる蛙乃いとこそこの古草
めでたさは蝶蝶なく　蛙
家ともなく昔は見ける　蛙の聲
家かゝや　桜をまくへく　鳴かぬは
玉川や先にたゝへと　よみへかは
世のせんとしき山となる　蛙哉

南都

新紀の古風を　捨ぬ乙多哉

色鏡をまくに折りける雲　雀哉
横雲のるなにいつしや　夕雲雀
柳散るよ手掛けのきん　角の端

右　八十五章　魚淵　二休　校

これ妙に世語とや待ふ　明り蛍
非風や　妙の　まなくる　山かな

奉納

おんなりし蝶も重なりし糸か哉
てふてふや此世のうちに分かなれば
蓮りし阿んな胡蝶の生まれかわ
田に翔よたんし華乃小てふ哉
門のそよ子ろ這へハとひ去へハとよ
さ蝶しるぬ蝶をふりつく又眠る
てふとひし娘山路の案内しる〻
孫白夫りしふみう名ハ
木の絵やこの座とる〻他生の縁

橋本町上人

御出や出まり参りし乃法談
このけ後のや日の中うりま一筋
御出のや草庵うゑの北着の山
九中上りしゆうゑとしる〻小村哉
笑しき九中上りうをた食小屋
家前さ綽を前まりしとさの家
出御しや昔と参りさ乃千代様
茶の香や霧の紙千しおして

かゝる程門内菜の花咲にけり
大菜小菜咲る側まで咲ぬ
春の日や暮てもみゆる東山
傘さして箱根越なり春の雨
春甫　新宅賀
安堵して蔵に梅さく春の夜
路糸
春雨やおふおふ生たる松の影
春雨や蔵乃なかるゝ角田川

宮花の中でもしかに春の雨
真弓の数にかゝりし春の夜
嬉いゐんしをつく
象よ流ろ〳〵せゐせ春は雨
水江春色
すゝかんも時や作しん春の月
清いもる紅二文深しや春の月
春風や牛にひかれて若菜売る
春の旅妓ん々部ゐ形りの眠

狗か嵐となり妻九桃
待くし日永とあれと四季戒
手の打つふかさつくえ女市の雛
押ゝか世やそこつの料も餅よある
新官を付ふもなかそ菜生月
好しや此としよりを嗚子月

観音奉納

只堂のめ奈もたゝりく阿の曲か
奈のてのけあへの他人ハあすか里

如病得醫

世を折相手ふとれし志やゝ式
世の法あむさん光折あつか里
所か法く在るもふしきそ世の法

三月十七日保科諸

世ちゝやと阿る本法も小屏帳
人撰しゝ一人あつ世の法
押ゝ法へや世を折るも口出る
茶の木ふ錆康つや渋料る

堪忍をつくしけり世の力給
山の月世を人を照しけるかな

刈萱堂

世の世を地蔵あきつけ親子かな
菩のあはれつく生まれて果報哉
大和めくりする人に旅のはなむけと
いつをさつけく
かへしは迷んなきを世の雲
今の世や猫も杓子も花見笠

元禄ハ家もむかしより聖子かな
昔の盛衰や古の栄けハ乱しく迷
山下常楽院に人々こぞりて出合も
仏縁ありけるかとし百年の
供養ありとて讃経ひと拝謁之
かく流るゝ塵の世にくすまる世の
結縁かゝるさゝふや此の時に
生れ逢ふことのうれしく志もなく
随喜の涙を掛けぬるのみ 其角

ふかくさのけしく咲らん時をと
おりしも花の色に移ろふや
あらんとさへ今を面白のかさ
みと眺りぬかくのみならぬ又
昔とかはらんされと前後の世を
思ひのこし物く新たの桜へ持ぬ
境界法佛必見様なるよ
花桐千　嫌も哭なよ　一大事
新吉原

行灯しきてをかむかしの雲
法所ふく
梓実ヶ聰てをしくる桜ヶ姫
人も家ふあつとしき色り　又桜
桜へとええて影ん　蝶形式
在原ふ入て桜のゆけはあやのふとも
一本ハさくらもあらけ安楽の役
此あうなまを世を　桜さくしけ氏
東西の色ふ散玄るまて也も

山ふかりけとのかは八三月
ちかきなり
櫻ときき筆も櫻の讃白哉
君が代の大阪嵯峨ヘ行ても
よきか所隣なる麻美ともの
日と申絵し盃なるふるれなきなり
何かとやらぬさたとて堅乃
命待ものゝこするに松本なり
しれ世懐に五元集とて

その何まは八ツ寛寛の白
おもしろかり
小坊主や親の作して山櫻
櫻しと唄されし寺木哉
かりまは生れて親もさくら哉
一ッ木に櫻ときさら花さかりけり
歎難哉
ふらんとや櫻の花を持なから
櫻花との歌をとかく

〽家園にもまてしを咲かゆかり

今かりしあとくさに菫哉

百姓の庭に流り合ふ流し哉

春の日乃入所なかり藤の花

根岸にて

山吹をさし出しさしぬ垣根哉

惣しふきらんとくるゝ蚕かな

さ間は流けに覆もまとへる蚕哉

やよ風遠く春の行方へ

地獄

夕月や獄の中なく鳴田なし

餓鬼

あちらや香ききなをも一處

畜生

藪原に仏とも法とも知らぬ哉

修羅

散りふ花の木蔭のさくら哉

人間

さくらの中ふうとあく　応生弐

天上

かすむ日やさそ　天人の法退屈

右

八十三章

春耕

稲長校

夏之部

下宮一菱のうらしるし　更衣

抑りしろい朝を昔まり更衣

としと八千代出済みやてうきく

そみの日や勢しも庭きのお若衣

あまからう綿ふきぬのとかくりとゝ

文鹿が舞ぬれあがりに

抑りうけの綿周にかゝる　初袷

小児の行末を祝して

ちよのはしめやてんにうてん乃初袷

春日野の藤や嗅子て袴かな

大山詣

口あけの木太刀をかつく袷かな

笠も持すと跳くや前法堂

かくまて家や孫八もされのまつりかな

夕立のけや雷の小船の夏花持

笠もの来さんと仕へてもらふかな

てもさてもてら福寿のあさんかな

通ひ路に階子はつゝめやまつさき

二十四年業花以一夜吟

花見し菜をまてしてはちりぬ

芥子さけて鶏集の中を通りゆき

卯の花乃垣に花代のちりもかな

庵の君あさくまくもあしかなし

家上へ今は咲くらん若乃宿

乾くも継紙の庵や菜の葉明

禅寺

猶しも掃除庭しや木下闇
清流の水ほとりのえへゝ高堂
世に出る人そよけ茶の合ふも
茶禅と呼ぶこともかこの寺
ゆつくれの大悟弟子を見物しるに
新かる者と那る　指この那
甚羅岩に腰かけて一聲を
きつくる圓月

家紋を持ちつ名乗し郎公
志とてこそ法村寺　松の月
浮くなれ猫のかたときみとも那
此上この寺古し　あとくされ
せんしきを家ありし家に乃航
能西八郎為朝人様の事
附る　堀宮めくも　よくつく守け
卯の花も　雪きて　さくらの航
先住の法けいくりあるも　かんこ鳥

閑窓

吉野の花月ハいつも閑古なる

高野山

地獄へハ形てまれとやかんこる
あの世は地れのここう深きる
悪をも吐く渋きしらす蘂
我り出るハ草叢乃蘂みてハ
同世家さハこましの野寺堂あり
草の野の茅やまたる人思とこの人

飛宿を見て明ゆくも出る松の郷
陸人や野の出てしと舘出り
草の野やまさ満りてて緑なる
野径の宿てゆる鄰の宇
としまくと見てや明野も耳知そハ
其渚や初雛の春の明る
猫のみをこふちりくの別をまふ
かくありや此ハ池と古風へ
藤の親笹の風ふかとまたり

神閑き天つゝ葉縁にゐり
あはれの中にさゝまる　左衛門

好箋

あはれや秋もかゝれ如山の穴

粒々皆心苦

あくのかや豆蒔しゞ田植唄
子て安や笑ふうゝまる州の窓
様せつけし子の泥ゝや空の月
萩の花言をまゐけを咲かなかゝ

右
五十八章　呂芳
士英校

曰く懈怠不惜寸陰　又
にふの日も様あすり也よ望も
乱のさ粒をみもかうなめて浮きなか
たとかれ粒ゝ子の泥あみふれゆき
初茸浅いとられる手風に
不患池

菴はや啼しぬ鬼か猿さへ
きれはしも菴となりしハ隅田川
名月や大那ぬつくろふ濡すり
紫の戸や孫のうそりにかゝる里
かさ法のすゝろく雲れ汲生の池
ありしふ安誌気ありね猿
席ろ菊あと程んして好れ在り
六月や月根見つけて蝉さゝれ
小童京

毎ろう篤しく香の清き哉
人あまる家ふあれよ冷し風
旅人や山ふ腰かけゝ心太
無限欲有限命
此風ふ不足いふあり夏座敷
桜波をめそとうこし立空夏
松影や扇てまねく千鳥雨
身ふそれハ出りうゝある扇哉
西山や扇散しふりつ月夜

獨樂坊を訪ひけるに庭のかけ花に
三界無安といふ事を
蝿よけの蚊帳も釣して扨とへ
豊年の穀を上る門の蝿
蝿一ッおもてハ玄むひしさて仏哉
せうよくハ丸むしとられ坂の蝿
侍に蝿を追せる味ふ都
尾まらつに蝿ハ身をまけりまける
蚤の糸かきへ為りに深乳ハ雅

のミ残く日和占ふ山家か那
蚤の糸ふれもさすさハ乗りき
揚帰や家も石に生まれける
揚帰や天はひつ津く筑紫川
託ふそくと鳥併を吟け声の蝉
新家にて
涼しさや搬のかきぬ小川蛙
春甫京へ行をを送る
染しらん這入りかは蔵の水

両國橋上

ゆふぐれは法図にいれ涼船
茶の宗介抜て涼風を
菱村の貨金別て夕涼
魚とりや桶ともたてゝ夕ゑみ
涼しさや弥陀成仏の此ほとりは
　繩子みる
新涼や汁の実きる背戸の流
きのふは鮮魚に宴しける今日は

松宮佛

秋涼ら笑ひ胡めくありしより
涼風やちから一ぱいきりぎりす
秋風も佛の舟はあまり哉
身の上の鐘ともしらで夕涼
上総国百首の郷より東南に
山連り西は海にて防人の
佳みし家の地なりとて此處
陣屋いとなむ躍けとしける

甚畠の娘にさしもなく
妙なる小家ありてとらへて
煙をも志らぬ老婆ひとり
麻をうみて居たりけるが其婦
人深く憐みて娘子ありやと
いふに老婆いふやうそのこより
まちわびけるかひなくのとし
古へをとかふにふり経て今ハ
江戸の本所とやらんに人の
髪ゆへわざをなすよし
風のきこえけれは此婦これを
聞きてかくこゝろみにさはくハ
其男嬉しがりてよろしき
髪結ふにしく家をなさ
へんとのこころかけに其男にハ
永く髪結司のゆるし文
とらせくれにハ生涯二人ともに
このやうにしく男をやすく

まくらぎんはさゑにの細き
縁ひをやむく遥くしちまの
はかなきものゝ哀れに無常を
観し凄くなる秋の初めには
かゝる月に西方を拝みひ
明暮ん任せに廿卅の経を
為家ハかんおもゐのしらくん
此の盛衰このかまへのさかりに
なることを天よりあゆに寄ひ

かしのみかなしとくし家を
志りそうきゆしこゑうつれよと
いふに毛謙むくしとちうく
しきを婦りして灯んはあるゐ
ゑらんやうあ首井なりし
いのやうよくもゆきむきかなの
り殺是ハいしハ先祖よりいく世
ともなく住なしく大なりのく
栖なれハ名もとく黄金里ならく

程なりとも我国にハ一揆乃
妻腹に志かすことを思ひ世人まさく
じきぞなよの小屋をもちなき
寝なれよしや命断るとも
承へハ終りしと身をもて足まで
見をも作りてなりぬるかに
中世ハ奉行人の悪事も今ハ
御すなきよむるまく執筆
のちにすらひをと始るらひ

縁ありしてつひに我親を
よろこく地とりなりぬれそれ
月日の照り添かさりて露霜の
地川に永ま生とし流るるの
出来れる国命をむさきうらん
志ゆきさをもこ力 老年して
ありける
月さへをもしられぬ世人文源を
雅 詠よく

志賀の路は山に花ある里も有
落の筆に深んと宿あく里有
迹りしも又ござれよ小夕立
湖からも出現しけり雲の峰
蝶の道雲の筆をりつきたん
投出しく足の先あり雲の峰
川狩や地蔵の膝の小縁甚
川狩のうし綴切りやむし木立

玉川

萩もちや色ある浪や夕ちらし
麻の葉に借り緒書て流しけり

右
五十五章

素鏡
文路 校